

糊染と蠟纈染の亀裂について

長野まつ・信吉けい子

染色手芸には絵更紗、蠟纈染その他種々のものがある。中でもこの絵更紗及び蠟纈染に於ける Crack 即ち亀裂は初心の人は必ず試みるものである。一般にはこの亀裂が機械による捺染でも、防染糊又は蠟による手描きであっても一向無関心で亀裂がありさえすれば蠟纈染として通用され喜ばれているようである。大量生産的な捺染模様としての亀裂についてはこゝに言う限りではないが、手描きの作品に現われた糊及び蠟の亀裂には糊は糊なり、蠟は蠟なりの独自の味を有し、又有すべきである。

この亀裂を初めて試みた人が、たまたま旨く感覚的に出来たとしても、次回に再び良い作品が出来るものとは限らないのであって、そこに亀裂の面白さ良さがあるとも言える。亀裂の良さはこれを見る人々の感覚に左右されるもので杓子定規に律することは不可能である。糊又は蠟を唯一面に塗りたいくってひび割れを作り、色をさせば訳なく簡単に出来そうであるが、事實はそれほど容易でない。熟練による所謂コツを知ることは良い作品を得る上に欠くべからざる秘訣であると思う。

然るに学校に於ける此等手芸的作品は基礎的手法に止まることが多く、出来上った作品は偶然に良くもなり、又却って作品全体を損う場合も有り勝ちである。そこで次に試みたものは深い熟練に依らなくても比較的旨く出来る一方法であると思う。研究と言うにはあまりにもさゝやかではあるが、教授面に於ける一方法として取り上げてみた。蠟纈染に於いては蠟の種類や松脂、ダンマル等の配合剤及び其の分量、温湿度等によって亀裂に相違を来たすことは周知であるが、蠟そのものが単独に現わす亀裂を手近な市販品に就いて試験してみた。又糊染については亀裂についての文献が少ないので、糊の硬さ、塗布する

分量，乾燥方法，焼明ばんの配合割合等につき検討を加え亀裂の状態を観察した。

A 糊染の亀裂について

実験材料

1. 呉汁を引いた未晒ローンを用い 20cm×15cm の大きさに26枚準備した。
2. 防染糊は市販メリケン粉と焼明ばん。
3. 染料は直接染料に浸透剤ネガールを加えた。

実験方法

1. 実験用布を平板の上におき周囲を押しピンで張りつける。
2. 防染糊は以下の配合割合のものをそれぞれ乳鉢でよくこね合せ，各布面に筆で平均に塗りつける。

○防染糊A（濃いもの）

メリケン粉 30g—40g 焼明ばん 6g—8g 水 35cc—45cc

○防染糊B（中間のもの）

メリケン粉 20g 焼明ばん 4g 水 20cc—25cc

○防染糊C（薄いもの）

メリケン粉 10g 焼明ばん 2g 水 20cc

3. 防染糊の塗布分量は以上3種の糊を
 - (イ) 全量を塗る。
 - (ロ) ½量……½量を塗る。
 - (ハ) 其他。
4. 乾燥方法
 - (イ) 自然乾燥によってひび割れを作る。
 - (ロ) 人為的にひび割れを作る。
 - (ハ) 乾燥日数に差をつける。
 - (ニ) 生乾きの間に板より布を離して乾燥する。
5. 色さし

直接染料染液にネガールを多量に入れて糊置した上より、たらぷり筆で塗る。

6. 蒸熱して染液を染着させ、後水中に浸して糊を剥離する。
7. 乾燥後アイロン仕上げをする。
8. 実験はすべて晴天日に行う。

実験結果及び考察

1. 防染糊A 全量塗布

	メリケン粉	明ばん	水	糊の状態	亀裂の状態
(1)	40g	8g	45cc	塗るには少々硬い目である	適当な太さ、長さで曲線を描く嫌味のない亀裂で大きな作品に向く
(2)	33g	7g	35cc	塗るのに丁度良い	(1)より稍太く変化に富む
(3)	30g	8g	35cc	同上	大小種々の亀裂、普通作品向き
(4)	30g	6g	35cc	同上	大小種々の亀裂、空間も適当

2. 防染糊A ½量—⅓量塗布

亀裂の状態は全体に細く短く又こまかい。

単独に用うる場合には良いが、ある作品のバック等には不向きである。

3. 防染糊B 全量塗布

糊の状態はAの場合より稍薄く塗り易い。亀裂の状態は太く、全面にやゝせゝこましい感じである。乾燥日数2日目のものは1日目のものに比較して亀裂の幅が太目である。

4. 防染糊C 全量塗布

糊の状態が薄い為、全量を一度に塗布することは不可能で、15分間隔に4回に分けて塗る。

4回塗布で全量を塗布した場合は染料が布の表面凡そ½位ににじみ出て亀裂は細くこまかく不可。

1回塗、2回塗、3回塗の状態でも染料を塗ってみても色が表面に出て亀裂は識別しがたく不可。

5. 防染糊 C $\frac{1}{8}$ 量— $\frac{2}{8}$ 量塗布

亀裂は細く、こまかすぎて色が表面ににじみ出て明瞭を欠き不可。

6. 乾燥後、手でひゞ割れを作ったもの

自然乾燥と同様に防染糊 A,B,C の全量又は $\frac{1}{2}$ 量、 $\frac{1}{8}$ 量塗布につき実験した結果、

防染糊 A 全量塗布は線が太く面白味がなく平凡。

防染糊 B 全量塗布は A より亀裂は稍、こまかく大小変化はあるが、太い線は見苦しい。

防染糊 B $\frac{1}{2}$ 量— $\frac{1}{8}$ 量塗布は色がにじみ出て亀裂の識別がしがたい。

防染糊 C 1回塗り又は15分間隔に3回塗り共に色がにじみ出て識別しがたい。

人為的に手で割る場合は、糊の薄いもの程、布全体が軟らかく、手で折りまげにくい。従って染料が表面に、にじみ出て亀裂は識別し難くなる故に A,B の防染糊全量を塗布するのが安全で効果的である。

7. 生乾きの間に板より布を離して乾燥した結果は次の様である。

防染糊 A 亀裂は短く太く亀裂面が少ない。あまり良いとは思われない。

防染糊 B 亀裂は細く使用場所によっては効果がない。

防染糊 C 全体に亀裂は細かく、こまかく且つ染色がにじみ出て不可。

以上の結果を総括すると、実験布を板に張り防染糊を塗布しそのまま自然乾燥して出来た亀裂は、実に自然的な美しい面白味のある亀裂であって、人為的に手で割ったり途中で板から布を離す事は好ましくない。防染糊を塗布する厚味と硬さの良否は、亀裂の出来工合いに深い関係がみられる。本実験では乾燥日数が1日目と2日目のもので亀裂の状態を観察したがあまり影響が見られなかった。日数の差がもっと多く又温湿度に変化があったり、室内乾燥と屋外乾燥等を比較すれば多少の相違が見られるであろう。又粉の質やねり方、塗る方向等による亀裂の変化も検討する余地が考えられる。

B. 蠟纈染の亀裂について

実験材料

1. 白絹布をマルセル石けん温湯溶液で洗い，充分すすぎ自然乾燥後，アイロンを当て，10cm×10cm の大きさに裁断。
2. パラフィン 6種
溶触点 120°C, 125°C, 130°C, 135°C, 140°C, 145°C
白蠟 3種
スターチェリ（工業用），化粧用，四国産
木蠟 2種
四国産，九州産

実験方法

1. 実験布の対角線にしんしを張り，布面を空間で平に保つ。
2. 以上11種の蠟を湯煎にしてそれぞれ溶融し，蠟の温度を $92^{\circ}\text{C} \pm 1^{\circ}\text{C}$ に保ち，防染操作を行う。
防染操作A 湯煎中の蠟の液中に，しんし張りをした布を浸漬して一様に蠟をつける。
防染操作B 細筆で花模様を布に画く。
3. 亀裂を作る操作
(イ) 直径 1 cm の竹棒に防染操作をした布を巻きつけ，そのままの状態
棒を抜き取り後，ロート溶液中で加重。
(ロ) 同じく棒に巻きつけ，棒を抜きそのまま荷重を加えて後，ロート溶液
中に浸漬。
(ハ) 手でつかみ特別の荷重を加えない。
4. 染料液に浸漬
染料はインヂゴゾール（ロンガリット建）染料の分量，浸漬時間は元井三
門里著「絵更紗の描き方」による。

実験結果及び考察

パラフィン 6種の溶触点が 5°C ずつ異っているが，亀裂の状態は大差無く，

強いて言えば溶融温度が高い方が、こまかい亀裂が入るようである。亀裂を入れる操作に於いて(イ)(ロ)(ハ)の3種を用いたが、パラフィン(イ)の操作では殆んど亀裂が現われない。僅かに溶融点 145°C の場合に極めて細い亀裂が見られる。(ロ)の操作に於いては、非常に多くの亀裂が入り、やゝ多過ぎる感じがあるが、あくまでもパラフィンの亀裂は極めて細くこまかく、亀裂の入らない部分は白地が美しくぼやけていない。(ハ)の操作で手でつかんで亀裂をつくるのは、圧力の加減が困難であるが、比較的美しい自然な亀裂が見られ、強いて言えばパラフィンの溶融点の高いものの方が亀裂が多く入っている。白蠟3種と木蠟2種ともに、単独では、蠟纈染として使用できないという結果が見られた。(イ)の操作で白蠟は亀裂が太く現われるのに対し、木蠟は亀裂の識別が不可能で、且つ両者とも布全体が淡い色に染まって、パラフィンの場合のような白さは見られない。(ロ)の操作に於いては亀裂が入り過ぎて、殊に白蠟の四国産は白く残っている箇所が少なく全体にぼやけている。(ハ)の操作でも白蠟、木蠟ともに非常にぼやけた太い亀裂である。以上の実験結果を総括してみると、亀裂を入れる操作は、手でつかむという(ハ)の操作が比較的自然的な美しい亀裂をつくり、糊染の場合と対照的で興味深い。パラフィンは単独でも、相当美しい亀裂が得られるが、木蠟、白蠟は布との接着力が弱いので、他種の蠟と混合又は松ヤニ等を加える必要があるのも当然と言えよう。糊染は比較的割り切った必然さを持ち、製作の成果がかなりはっきりしているのに対し、蠟纈はかなりの偶然性が作品を支配するので、両者の亀裂を比較検討はできないが、序文に述べたように、それぞれの味わいは捨て難いものである。

参 考 文 献

- | | | | |
|------------|--------|--------|-------|
| 絵更紗の描き方 | 元井三門里著 | 藤纈染 | 美和正忠著 |
| 藤纈の実際 | 北室清一郎著 | 染ものの技法 | 野口道方著 |
| 染色手芸 | 主婦の友社 | | |
| 染色と図案(第3集) | 青木武著 | | |